

# 教師としての育ちと学びを考える

## －教員免許更新制の導入との関連で－

安彦 忠彦

### はじめに

・「教師」をめざす教員であれ！＝「先生」と一言で呼ぶけれども、普通、学校などでは「教員」というふうに言われているわけで、「教師」となると、子供の師表として、つまり子供の模範、モデルとしての人の意味になる。これは、必ずしも教員でない人でも、「教師」になる人はあちこちにいるわけであり、そういう意味では、一言で言えば、「教員」という身分、つまり公務員という身分というか、そういう身分で、「教師」という部分がある意味ではおろそかにする、という大変に思われるけれども、どうしても、その「師」の部分というのが欠ける場合が多いわけである。これは、教師のひとつの特徴というか、警察官などもそうであると思われるけれども、その職務にある種の「不自由さ」を帯びるということである。この不自由さを、俺も人間なのだからという形で適当にというか、他の普通の人と同じような仕事、同じような人と一緒に扱っていいかという、それはやっぱりそうはいかないわけである。そういう不自由さを、ある意味で承知の上で教員にならないと困るわけであり、この点、「教師」というものの一つの特性だと押さえてほしい。

同時にそこに、専門職者にふさわしい専門性の維持向上が必要であろう。これは改めて、教え育てるという仕事が専門的な仕事だということである。他の人は、普通なかなかなやれない仕事で、それに対する専門的な力量を持たなければ

はいけない。そして常にそれを維持、向上させるということが必要だと言える。そうすると、研修で5年研とか10年研とかがあるけれども、いつまでに、どのような教師になるのかについて、これはやはり自分でイメージを持たないと困る。持たないまま、ぼーっとして行けるならば、イメージをもつのは余計なことに見える。研修についてもそうなるため、何か周りから用意されてしまうと、押しつけだという受け止めになってしまう。

まずは、筆者としては、次のところが大事で、言ってみれば、自分が本当に教師らしい教師になる、優れた教師になるということについて、どれほどの意欲というか、欲求を持つか、そういう意欲を持つことが大事であって、それがなかったら、そもそも、周りから、あるいは自分のすぐそばにどんな機会があったとしても、全く無駄になるわけである。そういう意味で、まずは自分が模倣したいと思う、最高に優れた教師、こういう先生がいた、自分の恩師だったり、あるいは身近にすごい先生がいたり、そういう先生に少しでも近づけたらなというような思いを、そういうモデルとして、そのような思いを持たせるような、そういう人がまず心の中に無ければ、ここに筆者が論じるようなことでも、ほとんど何の意味もないわけで、そういうものになりたいという、まずは、欲求が大前提である。

今回の教員免許更新制というのは、言ってみれば、講習で対応しているわけであるけれど、

ある意味で、生涯にわたり自己研修の一助とする方向で、いわば換骨奪胎して、元々自民党が提議して作れと言った時は、不適格教員を排除したいという趣旨で作られていたのに対して、本省たる文部科学省は、そういう趣旨よりはむしろ、それぞれの先生方の力量をその都度、向上させるような方策の一助にしたい、そういう意味で、自己研修の一助にしたいということで、かなり中身を変えたわけである。この点については、そういうチャンスが、率直に言って、自分にとって良い、あるいは、良くてなかなかそういう機会を利用できない、条件その他でそういうことがあっても難しい、という率直なご意見がある。そこでこういう部分については、そちらのほうの条件整備をしっかりとしていかなければいけない、というように思う。しかし、いずれにしても、全体として、そういう向上心というか、教師としての向上心をもつ、その一助として、この免許更新制度というのを活用しようとするとか、そういった主体性をもってほしいのである。そもそも無ければ無い方がいいのだと言われるなら、確かに中にはそういう制度もある。けれどもこの制度は、そんなにマイナスにばかり働くと筆者は思わない。本当にマイナスだったら、確かに反対して戦ってもいいけれども、自分にとって、自分の得になるような形で活用できるものはかなりあるわけで、そういうものは、どんどん主体的に使った方がいいと思うのである。

## 1 中央教育審議会（中教審と略称）： 教員の資質能力向上特別部会の答申の趣 旨を考えて

### （1）現状と課題：① グローバル化社会の21 世紀を生き抜くための思考力等を育成す る、新たな学びに対応した指導力が必要＋ ② 学校現場の諸課題の高度化・複雑化に 対応した実践的指導力の育成強化が必要

最初に、中教審で、とくに2013年の1月までの第6期中教審の中に、教員の資質能力向上

特別部会というのがあり、そこで答申が出されたので、その要点だけはまず振り返っておきたい。この特別部会の答申では、現状と課題というところに、教員として求められる資質能力について、今の日本の社会において、現状の教員の資質能力のレベルでは不十分である、という認識が示されている。これは、教員養成のレベルで考えられているけれども、ひとまず今の社会は、一般的に考えても、筆者の観点からすると、いわゆる高学歴化社会になっている。この事実を、教員はもっとしっかりと認識してほしいと思う。今や保護者の半数近くは、教員と同じ学歴かそれ以上である。したがって一昔前の、筆者が子供の頃に、学校で教を受けた頃の教員の学歴よりも、ほんとに保護者の学歴は高くなっており、それが保護者全体の半数ほどに上っている。筆者は、繰り返しあちこちで言っているが、愛知教育大学で学生たちを教えていた昭和40年代の後半、そのころから、もうはっきりと学生たちに言ってきたことがある。「君たちが教師になって教えるころには、今は大学進学率が30%くらいだが、もうちょっと経てば、すぐに40%近くまで行くような時代であるから、一クラスの子供のうち、その3割ないし4割の子供の親は、君たちと同じ学歴かそれ以上だ。教師になれば、そういう親たちと向き合うわけで、もし、そんな親たちが一致団結して、例えば、仮に3割として40人学級だったら12人の親たちが、一致団結して教育論を吹かけてきたときに、1人でちゃんと対応できるような力をもたないのだったら、教師にはなるな!」と言っていた。その時点で、筆者はそういう時代が来ているということを、はっきり学生たちに認識してほしいだったのである。そして現実には、今、そういう状態になっている。

この点はやはり、現在、教員の対社会的な目線というのが、どうもあまりはっきり見えてこない。教員が、今周りの保護者や対社会に対して、自分がどう見られているかということを、いわばリフレクション（reflection）というか、

省みて自分の位置を見つめること、その点がどうもはっきり感じられない。かなり厳しい目で見られているということは、ジャーナリズムでもう周知のことだとは思いうけれども、それにしても、それに目をつぶるわけにいかないわけである。それがどれほど不当であり、筆者などからみても、おかしいことが書いてあるけれども、それにしても、その部分で、ちゃんと言い返せるだけの力を持たなければならない。もし、相手がそれについてまた反論してきたら、さらにやりあえるだけの力を持たなければいけない。そういった部分で、かなり厳しい状況があるという認識をもってほしい。

そこで①であるが、この特別部会では、グローバル化社会を生き抜くための思考力等を育成する新たな学び。これは、新しい学習指導要領の趣旨なのであるが、これを一応、新たな学びとこの特別部会は言っている。それに、対応した質の高い指導力が要するということ。

2点目は、②学校現場の諸課題の高度化・複雑化に対応した実践的指導力の育成強化が必要だということ。これは、対社会的に見て、というところが意識される必要があるということである。その中で、二つが挙がっており、ひとつは高度な専門性、社会性、実践的指導力、コミュニケーション力、チームでの対応力。特にこの「チームでの対応力」というのは、特別部会でも言われたけれども、総会の方で、委員の方がかなりはっきりと言われた。ひとりひとりの先生が頑張っているのは、色々聞くけれども、もっとチームとして、グループとして、教師集団として対応する力というのを育てておかなければならないのではないか、ということ。この点は、やはりかなり重要な指摘であると思う。もう一つは一斉指導の力で、創造的・協同的な学びは、コミュニケーション能力での対応による。一斉指導の力については、特にこれはこの特別部会のワーキンググループの座長をした横須賀薫氏が、宮城教育大学の学長を経験した方として、特に強調した部分である。言って

みれば、教師の専門的な力量の特徴は、一斉指導の力があるかないかだという。これは、斉藤喜博を尊敬した、いかにも横須賀氏らしいと筆者は思う。しかし、どちらかというとな筆者は、むしろ学習者個人々人への知覚・配慮と学習指導の力、ひとりひとりの子供の特性というのをしっかり把握して、その子供に個別に対応できる力というのが必要だと思う。

これは、医者や弁護士という専門職者は、基本的にそういう性質の力を持っているからである。つまり、ひとりひとりの患者の症状の違いに応じて対応できなければいけない。この点については一斉指導の発想では、到底対応できない。医者というのは、また弁護士の場合でも、訴え出てくる人が持ってくる案件というのは、みんなひとりひとり個人的な事情が違う。そういう意味では、ひとりひとりの事情の違いに応じて対応できる力というのをもっていなければいけないわけである。そういう観点から、筆者はどちらかというと、個別的な対応能力というのが本当に必要だと思う。併せて、言ってみれば、一斉指導も、一種の専門的な技能として要求される。同時に、こういう個別的な指導力量も要求されるという意味で、かなりレベルの高い、両方の力量を教師としては要求されていると考えていいと思う。これからは、特にまた、無視できないのがICT等の活用の力。これは、子供の方が生活の中でどんどん進んだ力をもってしまっているので、逆に子供に教えてもらってもICTを使える力というのは持たないといけない。さらに、社会的な背景の分析力。これは、今の子供たちが置かれている社会状況や背景のことで、非常に色々な状況、昔と違って個別に深刻な状況というのを抱えているので、そういうものについてしっかりと把握しないといけない。これは、特に個別的な対応能力に反映してくると思う。

こういう部分でも、以上の①、②に加えて、力量を求められているというわけであるから、筆者は一言で言って、もう大学の学部段階で

は、十分な力量の養成はできないと思っている。この点、現場の教員がどう思われるか分からない。そこで、この特別部会がよく「修士レベル化」と言って、大学院の修士レベルの力量というものを必要とする、ということを打ち出したけれども、何でそうする必要があるのか、どれほどそれは求められているのか、もうひとつ分からない、今の学部レベルでいいんじゃないかという声は、もう特別部会の中でも委員の間に沢山あった。しかしそれでも、それで今までやってきて、やはりあちこちから、言ってみれば、教員に対して、不信任感、あまり高い力を持っていないのではないかという疑問、そういうものが沢山出されてきているわけだから、やはり何らかの対応をしなければいけないという状況だと思う。

**(2) 改革の方向性:教職生活の全体を通じた、養成・採用・研修の一体的な改革による「生涯学び続ける教員像」の確立＝①「修士レベル化」に向けた現行の枠内での諸方策＋② 教員免許制度の改革：基礎免許状・一般免許状・専門免許状（全て仮称）の創設**

そこで、改革の方向性としては、そういう状況を前提にして、教職生活全体を通じた養成採用研修の一体的な改革による、生涯学び続ける教員像の確立を考えた。これは、生涯学び続ける教師として当然の姿勢ではないかという自覚、これを何らかの形で、サポートする制度というのを作ろうという趣旨。決して、教員の力量向上の邪魔をするのではなくて、むしろ教員のそういう思いを受けて、色んな足場を与える。あるいは、そういう思いに実現の機会を与えていくような形で、システムをちょっと作っていけないかというのが趣旨であった。そのひとつめが、①質的充実のための「修士レベル化」。これは、別に、「大学院の修士」というふうに決めているわけではない。中身がそういうレベルのものであってほしいというわけで、それを教育委員会と大学とで、そういうプログラ

ムを作って、力量向上を図ってもいいし、教育委員会が大学に対してその種のプログラム創設の要求をしてもよし、またそういうものを教育委員会自身が用意して実施するというのもいい。いずれにしても、そういう趣旨で、本省は、今専門職大学院の修士課程をやたら強調しているが、筆者は、大学院の修士課程だけに到底やり切れるものではないと考えている。そもそも量的に無理なのである。そこで、それに類する課程・プログラムというのを、各教育委員会なり大学なりが沢山作ってやっていいはずである。それは、むしろやって見せて、本省に向かって、これもいいのだと、こういうふうになら成果があがっているのだから、ということが言える。

それから2点目は、②教員免許制度の改革ということで、これが、基礎・一般・専門という、いわば生涯学び続けるということを形に表す、免許状の形で表すようなものを作ると提案されているわけである。詳細な制度設計の際は、幼稚園、特にあるいは特別支援学校とかの学校種や職種の特性等々によって、もう少し丁寧に、どういうふうに作っていくかについて配慮する必要があるというふうに書いてある。でもまだこのレベルにとどまっており、幼稚園の教員の方々については、実は、まだこの特別部会ではほとんど何も決まらなかったと言ってよい。この点は、今後のかなり重要な課題になってくと思う。

**(3) これからの教員に求められる資質能力＝「教師らしさ」の基礎**

大きな方向は以上のようなものだが、資質能力のところの点については、かなりはつきりとした文言が出されている。教員の、いわば基礎条件として三つが挙げられている。

**① 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）**

まず、教員の力量の質の問題がずっと考えられているわけなので、質について、どういう視

点で見ていくかというのを、答申では三つの面でとらえている。①として教職に対する責任感、探究力、教師生活全体を通じて自主的に学び続ける力。これは、言ってみれば、生涯にわたって、こういう使命感、責任感、教育的愛情を自ら育んでいく、自分の中に培っていくということを意識しているわけであるが、この点は、5年、10年、つまり5年研、10年研というのを、こういう力量向上との絡みで、ぜひ、教員自身が、いわば専門職としての教職の意識を高めていく、あるいは培っていく、深めていくということを、5年、10年という少し年数を意識的に決めて、そして、自分の中にこれでというものを決めたら、それに特化して力を身につけていく、そういう発想で、深めていってほしい。これは、特に単なる基礎的なところ、というふうにおさえられているけれども、言ってみれば、立場、役割であるので、教職という役割、それを支える必須条件である。これは、言ってみればそういう形で、専門職意識というのを5年目の場合は何に重点を置いて考えるか。筆者はやっぱり授業力中心で考えて、5年目くらいまではそういうことに重点を置く。それだけというわけではない。それから、筆者の実感では、10年目研修の講師をやった時に、長野県でやった際、受講した教員の中から、研修後のアンケートで、もっと指導法のことを教えてほしかったという声があった。筆者は正直言って、10年目に指導法を教えてほしかったと言われたのにはがっかりした。5年目くらいまでは、そういう声に答えて私もOKしたと思うけれども、やっぱり10年目、15年目になったら、少しは視野を広げて、横に広く見てほしい。学年全体とか、自分の教科だけではなく、他の部分にも関心を広げてほしい。そういう意味では、研究的な視点とか、もう少し視野を広げて、特定の指導法、授業力量ということだけでないものに、もっと目を広げて欲しかったと思う。カリキュラム、教育課程全体とか、色んなものがある。10年目、15年目位になれば、年齢的にも

30代の半ばに来るから、教科主任とか研究主任とか、場合によっては教務主任とかという、全体を見なければならない立場になってくるので、そういう場面で、何に自分が特化して力量を高めるかということを意識してほしい。

## ② 専門職としての高度な知識・技能

2点目の専門職としての高度な知識・技能は、「教科や教職に関する高度な専門的知識」が中核。グローバル化、情報化、特別支援教育その他、新たな課題に対応できる知識、技能を含むとある。グローバル化、情報化が、どの程度に今後の学校の中に影響してくるか、あるいは今の社会全体にどれほど大きな影響を与えているかについては、それぞれの先生方の自覚は多少とも違うとは思うけれども、やはりかなり大きな問題だと思う。高校の教員に向けてのこととして、正直言って、中教審で高校教育部会を立ち上げて議論した経験では、このグローバル化その他、情報化は多少違うけれども、グローバル化については、高校の教員が一番自覚していないのではないかと。特に進学校の高校の教員というのは、生徒がもう日本の大学のどこかに入学してくれること、それしか頭にない。大学は、今、ものすごいグローバルな競争の中にあり、外国の大学と競争しなければならない立場になっているので、目は外に向いている。反対に高校は、ほとんど日本の大学しか見ていない。外国の大学とか、外国の教育事情とかはほとんど見ていない。とにかくどんな有名進学校でも、ほとんど、日本の大学しか見ていない。だからグローバルと言っても、多分ほとんど、グローバルな視点なんていうのは進路指導上、使っていないのではないかと。そういう意味では、非常にこの1年、中教審・高校教育部会に関わって、副座長として関わったが、高校の教員に対しては、筆者は非常にネガティブな見方をしている。内向きだなあと思う。高校教育関係者には皮肉を言って、「あなた方はこれまで、鎖国状態じゃなかったでしょうか」と。本当に、もっと外国の動きや世界的な動きに対応していける



ような力を、高校時代からちゃんと子供に意識させて、そういう面に子供の興味や関心を広げていってほしいのに、相変わらず、どこどこ大学に何人という、そういう進路指導や、そういうことにしか価値を置かないような教育をしている人がほとんどだということである。こういう点は非常に筆者としては、不満がたまっていた。特別支援教育は、これは今回も、障がい者基本条約等の批准の直前というか、批准しなければならない段階になっていて、新しい特別支援教育がかなり具体的に進む。通常学級でまずは育て、障がいをもった子供たちでも、基本として通常学級で育てるということが、そういう方向にぐっと行くようになるので、ある意味ではそのことについて、しっかり知らないわけにはいかない状況にある、知っておかねばならなくなってくる。

それから、「新たな学びを展開できる実践的指導力」。これが現行の学習指導要領の趣旨に沿うもので、知識・技能の習得に加えて思考力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協同的な学びなどをデザインできる指導力が必要だということ。これは、特に、重点のところの「活用型の学習」というのが新しく入ってくる。小中学校の教科書を見ると分かるように、「活用する」ということが、子供に求める新しい活動になってきており、それを実行するため、他としっかりと区別して、教科書の中に、習得させる学習と発展的・探究的な学習の間に、色んな形で、その種の活動を求めるような問題が置かれていたり、説明が置かれていたりしている。残念ながら、高校が一番あいまいである。高校は、一気に課題探究の方へ行ってしまうのがほとんどで、活用ということ、その習得した知識を探究の方へつなぐための、媒介的な中間的役目を果たすという学習がほとんど意識されていない。残念ながら、高校の教科書編集者は、小中の方の教科書編集者と違って、不勉強だと筆者は思う。この点は、高校の教員の勉強不足は否

めないと思う。高校の教員は、そう言うては申し訳ないけれども、一言でいえば、結構、文科省が何を言うかと反発する。大学の人間もそうだけれども、役人が言っていることなど聞かんというような、結構、主体性の旺盛な方がおられる。しかし、大学の教員も含めてそうだけれども、国がやっていること、あるいは、誰かが何かやっていることの中で、社会的事実になっている部分がある。どんなに自分の意見がそれに賛成でなくても、自分の立場から言って、そういうのはおかしいとか、あんなものはあってはいかんとか、いくら個人で判断されることがあっても、まず、事実として国がそういうことをやっており、そういう社会的にも実施されているわけだから、これはまずしっかり勉強して、社会的事実としてどうやっているのかは知っておいてほしい。そんなものは知らないと言って、えらそうに「あんなものあってはいかんのだ」と言われても、学生の方が困ってしまう。学生はまず事実を前提に、教員になるためにそれに向かって勉強し、いわばそこでその事実を目の当たりにしているわけである。それが意外と、多くの大学の教員とか高校の教員の中には、俺は賛成ではないからと言って、もうはなから取り上げもしないし、一切触れようもしない人がいる。これは、非常に研究的態度に反する。目前に十分に社会的事実としてある以上は、それを知って欲しい。知ったことを示した上で、自分で問題点を提示し、その上で俺はこういう考えは反対だ、こういう事実はおかしいというのなら分かる。それを全くせずに、ただ遠くから批判だけするという人。これは、そういう意味では、筆者としてはあちこちを見て、特に高校の教員や大学の教職課程などを担当している教員の方で、そういう方に出会うと、やっぱりその態度はおかしいのではないかと反問してきた。

さらに、「教科指導、生徒指導、学校経営等を的確に実践できる」ということ。これは、基礎的なこと。また学校経営のレベルまで行くと、

管理職が必要とする力である。

③ 総合的な人間力(豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力)

3点目は、総合的な人間力ということで、これは括弧にあるようなものを全部含めて一括しているが、豊かな人間性、社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携共同できる力。これだけこう挙げてみると、こういうものが特別部会の答申に入っている。ぜひ、これはこれで、現場で働く教員一人一人が吟味にかけてほしい。別にこのまま全て正しいものとして、この通りに理解される必要はない。筆者は筆者なりに、これでは不満な面がある。

## 2 教師としての成長と研修：

### 子供の精神的生命を生かし成長させる高度専門職の条件

そこで次に、筆者なりのものを出してみた。「教師としての教員」というのは、公務員というレベルではなくて、一言で言えば、そういう公務員としてという自覚に加えて、ある意味では、さらに教師という教え育てる専門家として、単なる公務員以上の役割を果たす、そういうものを考えたときに、やはり「力のある先生」になってほしい、「力のある教師」であってほしいのである。これが、教員は「教育公務員」であって、一般の「行政公務員」とは異なる、という法律上の位置づけの意味するところなのである。しかも、ただの普通の教師でいいというふうにはいかない。そこで、そういう意味では「力のある教師」なるものをどう見るか。そういう「力のある教師」に向けて、教員自身が自分で自己成長し、またそのための研修を続けるということを願っているわけである。

教師というのは基本的に、最後のまとめを先取りして言えば、子供の精神的生命を生かし、成長させる仕事である。これは、一言で「精神

的生命」と言っても漠としているけれど、ある意味ではそれは、人間そのものの核心を決める仕事だから、教員の責任は重い。もう、特に小学校3年生までの教員の方は自覚しておられると思うが、ある教員の言葉で言えば「子供たちは、私の嫌いな自分の癖までまねる」と言う。本当に、教員自身がこんなところはまねして欲しくないというところまで、小3までの子供は教員の言動を模倣して、その通りにすることが多い。もっとも、そのままずっと育つわけではないので、そんなに責任を感じる必要はないとも言えるけれども、そういう影響力が非常に強い職業であり、そういう意味では責任の重い高度専門職なのである。人間的教養の深い、後でこの点についても触れるが、教育、教え育てるという仕事の専門家だということである。これは、日常どの人でも、親であれば、子供を教え育てるということをやっていると思う。だから普通の親たちも、平気で教育論を吹っかけてくるが、しかし、専門家じゃないので、専門的な勉強はしていない。その辺の区別というのをつけないで、いわば教員が比較される。これはひとつだけ例として挙げるけれど、最近のように本当に学校の教員が色んな形でバッシングを受けて、社会的になかなかちゃんと評価されないような時代になってくると、この社会的な評価を変えるのは容易なことではない。教員というのは、こういう専門的な力があるのだということを、社会的に認めさせるのは容易なことではなくなってきた。

これはある中学校の校長、東京都の中学校の校長の話であるが、ある荒れていた学校の話で、その荒れていた学校の校医さんがずっとその学校を見ていて、荒れてきたその学校に対して「学校の先生方はだらしがない、大した力がないんじゃないか」というふうに見ていた。ところが、校長が代わって来て、新しい校長がなんと1年間でその荒れた学校を本当に変えてしまった。校長は色々な手を使ったようだが、それがいいか悪いかはひとまず置いておいて、と

にかく、長年荒れていた学校が1年で、本当に静かな学校に生まれ変わった。それを見てその校医さん、何と言ったか。「これはさすがに教育の専門家だ」というふうに言ったという。これは校医さんの言葉として聞いた。これくらいインパクトを与える力を示さないと、本当に今、保護者の方、一般のそういうお医者さんだったりする人たちは、教員に力があるなんて思わない。そういう意味では、何か素人とは違う、普通の人がある教育とは違う何かを持っている、専門的な資格と力量を持った人たちだと思わせるものを持たなかったら、なかなか社会的な尊敬が得られない時代になっている。

### (1)「教育の本質」を深く探求しつつ、確かな教育技術を向上させ続ける人(教職教養)

そういうことを、私としては念頭に置いて三つの条件をそこに挙げてみた。一つは、**教育の本質を深く探究しつつ、確かな教育技術を向上させ続ける人**。これは、いわば、教職教養にあたるかと思う。教える育てるという仕事の、いわば独自性というのが何にあるのか、どこにあるのかということである。教職の専門だから、普通は教育技術の方に目が行く。教え方がうまいとか、教える技術を複数色々もっていて、その引き出しが多い先生とか、そういう部分は割合分かりやすいが、そもそも、それよりもっと大事なものは、「本質」と書いたけれども、考え方。教育ってというのは、子供をどうすることか。これは、早稲田大学に2012年の3月まで勤めていたが、そこで、学生が大学祭でシンポジウムを企画した。教職大学院に関わるシンポジウムだったが、そのシンポジウムの時に、筆者は中教審の委員だということで呼ばれて行って話したけれど、その時に、フロアの方から、「自分は、東京学芸大学の教職大学院で勉強している者だ」という。「実は、自分の教職大学院では、教育技術、実践的指導力という、教え方の技術については非常に丁寧に教えてもらっている。でも、それは教えてもらったけれども、それを

使って、どの方向に、どういう子供に育てようとするかについて、しっかり教えてもらわなかった」と述懐された。子供を、そういう技術や方法を使ってどういう子供に育てるのか、「目的」についてはほとんど教えてもらっていないことに気が付いたという。「先生はどう思われますか」と筆者に聞く。筆者は、早稲田の教職大学院にいたので、それを聞いて、いかにも真面目な青年の、非常に率直な疑問だなと思った。どうしても、教職大学院でも、教育技術の方に目が行きがちなのである。大体そういうふうに、文科省も求めていたし、そういう意味では、みんなそちらに力を入れるわけで、それを使って、どういう子供に育てるのかということは何も言われない。筆者はその学生に言った。「君は、教職課程で憲法を習っただろう。あれは何で、必修になっているんだ。一言で言えば、憲法というのは、**子供が未来の主権者**になることを明記している。そうだろう。子供は主権者としてふさわしい力を付けなきゃいけないわけですよ。憲法に、その中身がちゃんと書いてあるじゃないですか。主権者としてのどんな権利、義務その他もろもろがあるか書いてあるでしょう。だから、あれ必修になっているんですよ」と。教職科目で憲法を教えている法学の専門家でさえ、そういうことをちゃんと考えないで、ただ、必修科目にあるから、教職課程におかれているから教えている、仕方ないなと言って教えている。それでは困るわけである。だから、ある意味では、もう教職課程で、ひとつひとつの教科がどういう意味を持っているのかについて、一度本当に、それぞれの教職課程の人たち、担当者は、何のためにこの科目が置かれているかをしっかりと考えて欲しい。それを学生にはっきり伝えて欲しい。教職課程にあるから、ただ機械的に仕方なく教えている、というのは全然意味がない。

例えば、そういうことを含めて「教育の本質」というのは、ある意味で、かなりしっかりと考えなければいけないことなのである。決して技



術だけが大事なのではない。むしろ、それを使ってどういう子供に育てなければいけないのかについて、それこそ専門家らしい知識と見識を持っていないといけない。「自己教育の基礎を与え、それによって思考を高め、全体的な成長に配慮できる人」と規定したが、まず、大事なことは、「自己教育」という言葉である。これは実は社会教育の言葉である。「自己教育力」というのは、これ元々社会教育が使ってきた言葉なのである。社会教育というのは、周知のように、大人になった人の教育である。つまり大人になるということは、どういうことかという、自己教育できるということなのである。もう大人になったから、他人・他者によって、先生や親によって教育されなくても、自分で自分を教育できる、そういう存在だ、そういう人間になるということが、大人になることのひとつの指標でもある。したがって、自己教育の基礎を与えるというのは、そういうことであると言える。自分で自分を教育できるようなところまで、色んな力を本人に、子供に身につけさせるということ。そばから、いつまでも、他人に教え育てられる、という状況から脱却しなければいけないわけである。そういうことを通して、思考を高めさせ、しかも全体的成長の中の特定の部分は、訓練などで職業的な部分の能力を育てる必要はあるが、同時に全体的な成長に配慮できているということが、ひとつ大事なのである。これが、後で出てくる「普通教育」という教育の部分である。

ところで、**人格が全体で、学力は部分にすぎない**ということを自覚している必要がある。今、学力、学力と言い、文科省も学力調査をやったりしている。学力が、産業界もそうなのだが、そういうものばかりが求められている。しかし、一方で産業界は何を言っているかというと、コミュニケーション能力が必要だという。そもそも、コミュニケーションするというのは、あれは学力以前というか、学力が一部入るかもしれないけれども、学力を使うために、コミュニ

ケーションというのは必要なものなのである。人と交わりながら考えるというのも、一言でいえば、そういう人間関係をまず前提にしているわけだから、人間関係がスムーズなものになるかならないかが重要で、その元は人間性ではないか。人格的なものである。もし、それが歪んでいたり、浅薄だったりすれば、その人が使う力の部分、学力とか能力とかがどれほど優れていても、その人を信用できるだろうか。大事なのは人格の方であり、だから、**道德教育が本当に大事なものである。ただ、道德教育は学校だけではできない。**これは、本当は、家庭や地域、学校の外でも一緒になって、両方で育てなければならぬ、そういうものであろう。ところが**学校にばかり道德教育を、特に親が求める。**自分のことを棚にあげておいて。したがって、はっきり言うと、そういう部分については、教員は親に対しても言い返さなければいけない。反面、学力については、これは、先生方がそのために教科の専門家として雇われているわけだから、免許を取っている以上、責任を持たなければならない。逆に言えば、この分野については、それくらい、ある意味で気迫がいるのである。「ここは、私が責任持ちます。だから、こちらについては、一緒にやってください」と、そういうものの言い方ができないようでは、なかなか、さっき言ったように、40人のうち12人の親がもし団結して教育論を吹っかけて来た時に、言い返せないであろう。それくらい難しい時代なのである。

次に「無限の可塑性」を信じて、**わずかでも可能な限り各人の個性を伸ばすことに喜びを持つ人になれる人。**これは、「無限の可塑性」という表現に対して、私たちが学生の頃は「無限の可能性」と言っていた。私は、「可能性」という言葉があいまいなので好きになれず、この「可塑性」という言葉を使っている。これはどちらかというと、今は脳科学的な用語である。原語はplastic、プラスティック、プラスティシティと言うが、要するに色んな形に作れるとい

うことである。外からの働きかけで、いかようにも育てられる教育。育て方によって、いろんなものに育てられるということ。色んなものに育つということは、非人間にも育つのである。人間の子供というのは、非人間にもなれる。犬やオオカミの子供は犬やオオカミにしかなれない。人間は、非常に人間らしくない人間にも育てられる。逆に言えば、そういう意味では、本当に無限の可能性が、可塑性があるが、その時に、わずかでも可能な限り子供が育ったら喜べるという、そういう喜びをもてなければならぬ。年を取った教員ほどいわばマンネリ化して、そんなのはできて当たり前だ、そんなこともできないのか、お前は、というふうに、少しでもできたことに対して、その子のその成長を喜ぶというよりも、そんなの当たり前だろ、大したことないじゃないか、どうしてお前はこんなことが簡単にできないんだ、と批判の目でしか見なくなる傾向がある。ベテランであればあるほど、そういうケースを沢山見ているわけなので、喜ばないのである。子供からすると、これは非常に寂しい。ちょっとでも伸びた時には、ほめてもらいたい。そういう意味では、その喜びを自分が感じて、そのわずかな伸びに対して夢中になれる、そのわずかな伸びを自分が夢中になって生み出すことに、その夢中になれるということが大事なのである。こういう部分が、だから、教員の教師らしさのひとつの資質なのであろう。それが上に述べたように、そんなの当たり前だ、というレベルで喜びをもたなくなり、すっかりその喜びが無くなってしまったような人は、やはり子供から見ると、教師らしくないと感じると思われる。

それから、普通教育の上に専門教育を行い、「自立」させるまでが自分の使命と自覚して、個々人の進路は本人自身に任されるべき個人的問題だと尊重できる人。これは、専門教育というのは職業教育が一番分かりやすいけれども、それ以前に「普通教育」を受けさせている。小中というのは、普通教育のみをやっている。は

なから、職業的な訓練をやる、職業教育をやるのではなく、その前に、人間らしい最低の基礎的な力っていうのを、幅広く育てておこうというので、普通教育という制度があるわけである。だから、高校までは、少なくとも専門教育はやらないことになっている。そういう意味で広く一般的な教養というのを育てる。基礎教養というのを育てることにウェイトを置いているわけで、この点は、教育学者で教育実践家だった、ペスタロッチが最初にこれを言い出して、子供たちをすぐに職業訓練的なものに行かせる前に、もっと普通の基礎的な教育をきちんと受けさせるべきだということを言った。これは非常に大事なことで、そういう対比を意識して、その上でその両方を使って、「自立」させるまでが教員の仕事であり、親もそうである。これは、教育固有の視点であり、教育を定義せよと言われ、**教育の目的は何かと問われたら、「子供を自立させること」だと答えてよい。**一言で言えば、全くその通りであり、動物でも同じである。それを、「あるべき教育」といった場合は、全面発達だとか全人形成だとか、そういうことを言うと思うが、教育とは何であるかと「事実を言う」場合には、何を見るかと言えば、一言、子供を一人前にすること、自立させることであると言ってよい。これを欠かしてしまったら、本当に教育の意味がないと思われる。けれども、それをある意味で、先ほど言った「自己教育のできるところまで」というのは、今は「自立」までになるので、自立できるところまでが教員自らの仕事、使命だという自覚の下で、そこから先というのは、子供自身が自分の問題として、どういう進路を選び取るかというのを、子供自身の自由に任せていく。**「子供の未来決定の自由」を侵さない。**もちろん相談は受けて乗ってあげないといけない。しかし、それを横合いから、特にそう言っては申し訳ないけれど、高校などは、思い入れがあるのか、うっかりなのかは別だけれども、それが本人の問題だったり親の問題だったりするのを、学校

の問題にしていまい、学校として何人くらい国立大学に入れなければいけないとか、進路指導も、本人は医学部なんか行きたくないと言っているのに、君が医学部に行ってくれば、本校は名声があがるとかいう例がある。そういうのを裏に隠して、進路指導をやったりする。実際それはもう色んな形で露呈している。こういうところで、やっぱり教師という人が、そういう色々な誘惑に負けずに、きちんと、その子供のために本当に必要な決断というものをすることができかどうか。そこで、いい加減にその曖昧さを残し、あるいは妥協をしていたら、絶対に子供から見放されると思う。

また、「社会的要請と個人的要請をすり合わせ、後者を軸にさらに成長させる人」。これは、最近の例で言うと、中教審の高校教育部会で、事務方の本省の作ってきた案文があったが、そこにこういう言葉が出てきた。「各学校が目指すべき人材像」という言葉が出てきた。高校が、各学校が、目指すべき人材像。私は最初からこの言葉、嫌だなあとと思った。「人材像」が嫌だったのである。ところが筆者が副座長をしているから、あまりそう自分から言いたくない。誰か言うんじゃないかと1回目の会議では黙っていた。2回目で誰か言うかなと思って、2回目もちょっと様子をみてみた。誰か言うと思った。特に現場サイドの委員で、子供の目線からものが言える、校長会の代表とか、教師だったらそういう人は言うのではないかと思った。ところが誰も言わない。さすがに3回目に筆者が言わなければ誰も言わないんだなと思って言った。「この言葉は、私は非常に不適切だと思う」と。「少なくとも文部科学省は、これまで、初等中等教育の文書で、小中高の文書で、この人材という言葉を使ったことがあるか。ほとんどないはずだ。大学だったらまあ、大学生というのは大人を前提にするから、人材という言葉が使われることがあった、今までも。しかし、初等中等教育、小中高に関係する文書で、この言葉はほとんど使われたことがないはずだ。普通は、

今まで何て言っていたかという、人間像と言ったはずだ。各学校が目指すべき人間像と言わず、何で人材像と言わなきゃいけないのか。」皮肉を込めて、「まあ、これは経済産業省が出す文書だったら仕方がないと私も引く。でも文部科学省の文書であれば、少なくとも、個人的要請、子供の方の状況も入れて、子供の成長とか発達とか、個性とか、志望とか希望とか入れて(すり合わせてというのはそういうことである)、それらを入れて、より合わせてものを書くのが文科省の独自性だろう」と。そのことが、すばっと欠けてしまって、これは言うてよいかわからないけれど、副大臣だった鈴木寛氏の影響じゃないかなと思う。鈴木寛氏は文科省の役人にかかなり影響が大きかった。鈴木氏は、もと経済産業省の役人だったから、彼は平気で人材という言葉を使うわけである。ただ、まさに経済的な観点から、ものをずっと考えてきた人なので、人材という言葉を使っても抵抗がないわけである。でも筆者は、教育の世界を経験してきて、どうもこの言葉は、少なくとも大学から上では使っても抵抗が無いけれども、小中高の段階では普通使ってこなかったし、すごい違和感がある。そうしたら、「何だあの先生の発言は、副座長なのに」という雰囲気になった。筆者が事務方と一応話し合った上でこの原案を出してきていると委員の人たちは思っているから。何であの先生は急に問題を言い出したんだという雰囲気。それまで筆者は2回我慢していますから、だから、かなりアグレッシブに、強い調子で言った。以後、人材像をやめて人間像になって、出された最終的な報告は人間像になっている。例えば、そういう言葉に対してどう感じられるか。筆者はやっぱり、今言った通りである。これは、特に「子供を軸に」としてあるのは、やっぱり子供の側の視点というのを持つことが、教育の方の独自の視点だということで、この点やはり深く考えてほしい。

それから、「これらの自覚を基にした教育技術」。これが最後に挙げられる教育技術。ここ

までの5項目は、一言で言えば、思想的なというか、哲学と目的といった部分で、思想の部分である。それを実現できる技術というのを、他方でしっかり持たなければいけない。これは言われるまでもないことである。

## (2)「教科の専門」知識を身につけようと常に努力し続ける人(専門教養)

2点目は専門教育、教科の専門について。教科の専門というのは、一言で言えば、それぞれの親学問の世界を教員、教師というのはどれほど知っているのか。

まず、学問研究の成果というのは、現代では決して絶対ではなく、常に変わる。自然科学の分野だったら、数年でどんどん前の研究成果が否定されたりする。そういう意味では今は、常に絶えざる追究過程にある。**科学というのは基本的に、絶えざる追究過程である。**それは、一般の方も、もう実感している。だから、そういうものだとか相対化できなければいけない。科学あるいは学問で、こうだと言っていることは、決して絶対ではないということ。誰か別な人の研究が始まったら、いずれ否定されるかもしれない。そういう意味で、人間がやっていることは全て相対的なものである。絶対だなんてことを誰か言い出したら、まゆつばじゃないかと思ってい。そういう意味では、学校の先生こそ、むしろそのことを深く実感しなければいけない。ところが意外と子供の前では、俺の言うことは絶対だみたいな、ついそういう姿勢を取りがちで、その結果、科学全体の全面肯定というか、そっちに行ってしまう人がいる。そういうことは基本的にない、ということである。例えば、今までの研究ではこうだと書く、アメリカの教科書などははっきりしている。「今の考古学者はこう言っている」という。だから、教科書の文章が異なる。「今の歴史学者はこう言っている。」と。ところが、日本の教科書は、まるで全て絶対正しいものであるかのように書かれている。そういうのは、本当は、筆者は変え

るべきだと思う。それが1点。これはしたがって、非常に学問というものをしっかり知った人であれば、研究上の第一線の研究者であればあるほど、こういう自覚があると言える。

次に、学問の基礎概念の熟知と、最先端の研究成果の理解に努める。それらが背中合わせのことが多かったり、見方によって、多様で多面的にみえると分かる人、でありたい。だいたい、学問の基礎的な概念、ゼロとか無限とか、そういう基礎的な概念というのは、言ってみれば、なかなか本当は分からない、非常に抽象的なものである。それでも、教える立場の人間はそれをしっかり知っていなければいけない。熟知している必要がある。同時にそうすると、大体最先端の研究というのは、もっとも基礎的な概念のところを突いている。原子、分子、一番の物質の最小単位は何か、みたいなところは、そこが一番基礎的なものである。ところが最先端の研究というのは、それを否定したりする。すごい研究というのは、大体その部分に関わっている場合が多い。したがって、筆者も時々言うが、ビッグバンなどというのは、宇宙の非常にマクロな説だけれども、実はあの説は、あるかなしかのものが、とにかく大爆発を起こしたなどという。あるかなしかって何だろうと考えたら、完全なミクロの素粒子のレベルの話である。だから、宇宙論と素粒子論という、一番マクロと一番ミクロのものが背中合わせでくっ付いているのが、今のビッグバン説だったりしているわけだから、これはもう本当に不思議で面白いものなわけである。そういうことを筆者が言っているだけではなく、ついこの間、テレビで宇宙の話をしていたアメリカのある科学者が同じことを言っていた。ビッグバンというのは、ミクロの、一番ミクロな研究が、一番マクロの研究と背中にくっ付いてしまったんだと。だからこういうことが、ある意味で、とっても面白い。筆者などはとっても面白いと思う。教員の方は、それを面白いと思わなければ困る。ところがどうも、そこまでちょっと突き詰めていない。

見方によって異なるというのは、対象を多面的に見ること。対象を多面的に見るというのは、例えば歴史を勉強すると、歴史で、それが一番多面的だというのがはっきりするのは、戦争である。勝ったか負けたかどちらかになるからである。勝った側と負けた側の歴史は同じではなく違う。はっきりしている。だから歴史に万人共通の真実があるとかないとか言うけれど、誰が見るかによってその真実や事実というのは見え方が変わる。戦争の場合がいっぱいはっきりしている。もう一つよけいなことを言えば、イギリスの世界史の教科書を見ると、そこに一つ、こういう章がある。「近代の後発の二大強国」。後から登場してきた二つの強国。どこの国とどこの国だと思うか。これは日本だったらちょっと考えられない。なんと、アメリカと日本なのである。イギリスから見たら、後発の二つの強国というのはアメリカと日本なのである。それはヨーロッパの方から見ているからである。でも日本人はどうか。アメリカは先進国に入っていて、自分と横並びになっているなんて思っていない。これではっきりと歴史観が違うことが分かる。そういうことをいわば多面的という。もっとしっかりと広く勉強していくと、面白いことがいくらか出てくる。そういうことに、学問的なことを含めて、もう少し教養を深めてほしい。

### （３）「子供・人間理解」を深め続ける人（一般教養）

3点目が、子供、人間への理解を深め続ける。これは人間の捉え方である。人間観、子供観。子供を敬愛し、その興味・要求、発達段階、個性などを知らうと努めるとともに、その希望、志望、こだわり、意志などとの関係に配慮し、子供の内面の特徴たる両面性、多面性、脆弱性をも考慮して対応する。

「敬愛し」と意図的に書いたが、子供を尊敬できないで、足で蹴ったり、それこそ体罰などをする人は、正直言って教育者にふさわしくな

い。そもそも足で人を蹴するという行為を、反人間的なことだと思わない感覚が問題である。そんなのは当たり前で、みんなやっているではないか、テレビでもやっている、普通のことじゃないか、という人の感覚が、言ってみれば、今いろんところで問題になってきていると思われるが、もっと本当に、そういうことについて敏感にならないと、到底教育は成り立たない。子供を育てるというときに、子供を一人の人間として敬愛できなかったら、あるいは尊敬できなかったら、到底そんな行為を取れるはずはないと思うのであるが、どうも平気でそういうことをやる人がある。一方でそれをやっておきながら、他方で何か体罰が起きたというと、盛んに起こした人を批判したりする。実に大人のそういう態度は矛盾していると思う。そういう意味では、こういうところに、やはり子供に対する問題として、子供の内面の両面性、多面性を考慮せず、この子はこういうもんだと決めつけたがる人が多い。学校の先生はとくにそれをやりがちである。でもそういう場合は非常に気を付けなければいけない。子供は必ず反対側の性格を持っていたり、そういう多面的な側面を持っているということがわかるように気をつける。強い子が同時に非常にもろかったりするわけで、そういうことに対する配慮がやっぱりできなければならない。

もう一つ、「子供を完全に理解できないと知りつつ、そう努力してやまない人」というのは、これは筆者の専門分野が中学校教育なので、中学校の子供を見ていると、正直言って、中学生はストレートには信用できない。口で言っていることと実際にやっていることが不一致になっているけれども、平気な顔をして強弁するような子供が多い。中学生はまさに反抗期だから、そういうときに、信用できないけれども、信用できないければ、教育は成り立たないので、ではどうするか。ぼくはここに挙げた言葉を、「間接的に中学生を信用しているもの」と見る。理解しようと努力してやまない、やめてしまったらダ



メ、努力し続けるということである。だから間接的に信用している、ということになる。その子が変わるだろうと信じる。でも、やっぱり表向きというか、直接的には信用できないと思うながら、なおかつ理解しようと努力し続ける、最後までやめない、それが大事なことだと思う。そういうものが前提にないと、この時期の子供の教育というのは、たぶん不可能だと思われる。

改めてそこまで考えたうえで、最後に、これはあちこちで繰り返していることなのだが、新しい学習指導要領の、これからの学校教育の一つのポイントは、この認め合う集団を作る。これは今まで、先ほどコミュニケーション能力が子供たちに欠けてきている、核家族化や少子化その他いろんな条件が影響していて、こういう集団的な交わりというか、交流経験というのが減ってきたから、一定の規模をもつ学校でしか集団が形成できなくなっている。それなら学校での集団というものをうまく活用してほしいということ。

もう一つは、活用型の学習。探究的な学習に最終的には持っていきたいのだけど、従来の総合的学習などでやっている探究的な活動が、教科の勉強とつながっていない。教科で習得した技能や知識を使って学習していないじゃないか、という批判を受ける。そこで中教審で議論した結果、真ん中につなぐ活動を入れよう、と。それがこの活用型の学習なのである。だから、習得した知識、技能を活用するという基礎経験を、ならし運轉的に与えて、それをやっておけば、探究的な活動のときに、子供は自分で主体的に、そういう知識技能を使うだろうということ。これが活用型の学習導入のカギになるわけである。

2点目は、学校という公教育のこと。私は公教育と私教育を分けてほしいと言っている。中教審でこういうことを言っても、なかなかスッと理解されていかない。しかし、えてしてこれをごちゃごちゃに混ぜたまま、平気で教育論だ

から自由に言わせろ、という人は、中教審に行っても居られたり、かつての教育再生会議の委員の方々にもいた。公教育と私教育は明らかに違うわけで、この点ははっきりと区別してほしい。自分の教育論、つまり自由勝手に息子や娘を教育する教育論を持ってきて、学校でもこれやれ、あれやれというのはまったく見当違い。学校というのは、法律の元でちゃんと、一定の枠組みの中でやっている仕事。そういう意味では、先生方は自由にやっていないはずである。検定教科書もあれば法律もあり、免許状もあるという、公的な制度の枠の中でやっているわけで、そのことをもし認めたくなければ、きっぱり教師を辞めなければならない。もっと自由にやりたいなら、本当に自分の娘や息子のように教育したいなら、まさにその自由さが私教育の特徴であるから私塾を開く。本当は吉田松陰が松下村塾でやったのは、まさに自由な私教育だったからである。よく吉田松陰の教育が良かったということを、明治以降、日本の教育のモデルみたいに言うけれど、あれは私教育だから自由なことができた。公教育だったらできない。明治5年につくった公教育はどうか。国が求める人材しかつくっていないではないか。時代を超える、ああいう人材、坂本竜馬その他、時代を超える人材をつくるのは、私教育がやれることなのである。この点は、やはりはっきりと意識していただきたい。だから今の私教育はほとんど、家庭教育はダメになっているし、地域もダメで、企業内教育もダメになっている。いわゆる予備校や私塾などはまさに私教育なのであるが、これはみな公教育の補完しかやっていない。本当は私塾などは、そういう新しい自由な、時代を超える人材を作ることが可能な制度、仕組みなのだから、それを活用しなければいけない。そういうことを言っている私は、予備校や私塾をやる人にはっぱをにかけているのだけれど、でも意識の高い人、例えば、大阪大学の総長だった鷺田清一氏は、自分で私塾を始めた。これはやっぱり、彼は、まったく時代を超

える人材を育てたいからとっている。予備校などと違う完全な私塾として、10人、15人の子供を集めるということをやりました。そういう方向が今後は望ましいと思う。

あとは、これはもう私の基本的な構えで、最初に申し上げた、「医師は人間の生物的生命を、弁護士は人間の社会的生命を、教師は人間の精神的生命を扱う、高度な専門的職業だ」ということ。それだけ難しい職業なので、やはり一定の社会的尊敬が前提にならないといけない。あんな先生に教えられてもダメだよとバカにされている先生に、子供が効果的に教育されるはずがないのである。この点が非常に重要なことであり、いま教師へのバッシングが多いけれども、こういうバッシングを受けていて、本当に先生方は、私からすると、本来の教育機能を発揮できなくて困っていると思う。社会的雰囲気はちょっと違うだけで、もっとずっと大きな機能、役割を果たせるのである。この点はやはり、これは文科省の3代ぐらい前の事務次官の銭谷眞美という方が言われたが、OECDの学力調

査や国際学力調査で上位に来ている国は、ほとんどすべて教師の社会的評価が高い国だと。確かにそうである。私はかなり相関が高いと見ている。そういう意味では、この部分はやっぱり大事なことである。そういう、いわば、尊敬を受けられるような資質、能力、資格というのを、教師はやはり持っていなければいけない。それを尊敬されるべき能力あるいは品格としてぜひ意識して、これからの力をつけていていただきたいというふうに思っている。

---

### 【参考文献】

- ・安彦忠彦『公立学校はどう変わるのか』教育出版、2011年
- ・同上『「教育」の常識・非常識—公教育と私教育をめぐって—』学文社、2010年
- ・中央教育審議会・教員の資質能力特別部会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(審議のまとめ)、平成24年5月15日